

## 子どもと保育の情景 (20)

# みんなで遊ぶと楽しいね

戸田雅美

私の勤めている大学には、〇歳児から二歳児までの子どもが生活する小さな保育の場がある。保育を学ぶ学生たちは、ほんの数日ではあるが、この場に身をおいて学ぶ機会があるのだが、多くの学生が、このナースリールームの保育に憧れ、それぞれが経験した、小さなエピソードを生き生きと語ってくれる。

### 一歳児の子どものたちのエピソードから

るなが、一人で、床に座ってままごとの遊具で遊んでいた。その近くで、せいやが、電車の積み木を床に

置いて、走らせて遊んでいた。しばらくすると、せいやが、走らせている電車が、るなの背中にぶつかりそうになった。すると、せいやは、るなに「どいて」と言うように、るなの背中を軽く押す。

ところが、るなは、どこうとする気配がない。わざとどかないというよりも、るなは自分の遊びに夢中で、押されていることには気がついて、それが、どいてほしいという意味だとは、気づかない様子である。しかし、少しも動こうとしないるなの様子を見ると、せいやは、るなを強く押して場所を空かせようとし始めた。

それを見た保育者は、せいやを止めるのではなく、二人から少し離れたところで、身をかがめて両手を床について、「せいちゃん。こっちに、トンネルがありますよー。どうぞ、どうぞー」と楽しそうにせいやを誘った。せいやは、その声と、保育者の体のトンネルに魅力を感じたのか、電車を押して、保育者のトンネルにもぐっていった。それを見た、ほかの数人の子どもたちも、次々と、保育者のまねをして体のトンネルを作り出した。せいやは、電車を押して、友達のとんネルに向かっていた。そんなせいやの遊びの広がりにも、ほとんど気づかないように、るなは、自分の遊びを楽しそうに続けていた。

「先生が、いきなり、体でトンネルを作ったのにはびっくりしました。そして子どもたちが、次々とトンネルになってしまつて、トンネルだらけになったのは、本当にかわいかった」とは、このエピソードを語ってくれた学生の感想である。

## 二歳児の子どもたちの エピソードから

かずきが、一人で、ままごと遊びをしていると、ともことゆうが、近づいてきて「入れて！」という。しかし、かずきは「だめ！だめー！」と強く言う。ともことゆうが、困っていると、保育者が、「みんなで遊ぶと、楽しいのにねえー」とゆったりとつぶやく。ところが、それに対しても、かずきは「だめー！」と拒否する。

「そうかー。みんなで遊ぶと楽しいのになあ。でも、今はいやなのかな……、困ったねえ」と保育者はつぶやく。そして、しばらくすると、保育者は、ともことゆうに向かつて「こっちにすてきなおうちをつくりましょうか」と言つて、かずきが使っていないままごとの遊具を集めて、おうちの場を作つていく。ともことゆうも、最初は、少し不満そうだったが、場がおうち

らしくなっていくにつれて、うれしくなってきたらしく、遊具を手手に、新たにできた場で遊び始める。

「ともちゃん、ゆうちゃん、おいしいご飯作ってくださいね」「何だか、いい匂い、おなかですいてきました」などと、タイミングよく保育者が声をかける。それを聞くと、ともことゆうは、ますます張り切って、手を動かす。そんなふうにして、この場には、だんだんと、ままごとらしい雰囲気が広がっていった。

すると、その雰囲気を感じてか、やすゆきとみどり  
が、「入れて」といつてやってくる。

「どうぞ、どうぞ」と保育者が答えると、「どうぞ、どうぞ」とともことゆうも、お客を迎える主人のように、二人をやさしく招き入れる。といつても、やすゆきとみどりがお客になるというわけでもなく、四人は、思い思いの場に、座ると、それぞれが鍋をかき回したり、おもちゃの食材を切るまねをしたり、料理をし始める。

こんな具合に、この場は、ますますにぎわって、楽

しい遊びの雰囲気が出てきた。「みんなで遊ぶと楽しいねえ」と、保育者がつぶやくと、四人は、にこにことする。

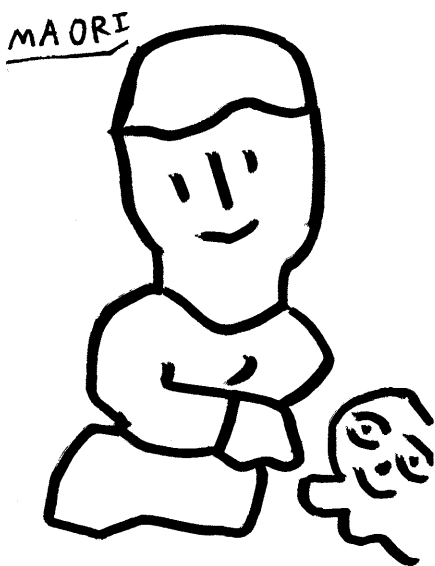
この様子が、気になるらしく、かずきは、時どき様子を見てやってきていたのだが、とうとう我慢できなくなったのか、「入れて！」とやってくる。ともことゆうは、先ほど断られたことも忘れたように、「どうぞ、どうぞ」とかずきも招き入れる。かずきは、あつさり入れてもらうことができ、うれしそうにしている。

その様子を見た、保育者は、「みんなで遊ぶと楽しいね」と言う。「みんなで遊ぶと、楽しいね」と言い合うように、子どもたちは、にこにここと、顔を見合わせる。

「かずきくんが入れてあげなかったときに、先生は、入れてあげるように、かずきくんに言うのかと思ったのです。でも、別の遊びになつて、それだけでもなるほどと思ったのですが、その後、かずきくんが入ってきて、ちゃんと仲良く遊べてしまつて。本当に驚きま

した。」とは、この場面を見てきた学生の感想である。

るなに、「せいやくんが、どいてって、言ってるよ」と言葉で伝えることは、簡単である。しかし、今、自分の遊びで夢中になっているんなの様子を見ると、できれば、自分の遊びに没頭する時間を大事にしたいと思うだろう。せいやに、「こっちを通るといいね」と言



うこともできるが、それでは、せいやの遊びのイメージ、それはたとえば、こんなふうに遊びたいという思いが、妨げられたように感じてしまうかもしれない。

一歳児の思いは、やわらかい。全体や周りを見て、折り合いをつけるということも、いずれ大切になることではあるが、まずは、やわらかく芽生えたイメージを大切に育てたい。保育者の子どもへの理解の深さと工夫が、一歳児の世界に、「みんなまで遊ぶ楽しさ」と「自分の世界に没頭する楽しさ」の両方をそれぞれにつくりだしている。

二歳児の例も同じである。みんなで遊ぶ楽しさは、子ども自身が、本当に楽しいと実感してこそ、その意味が確かなものになる。大人が、こうあるべきといふねらいを指し示すことは簡単だが、その意味を、子ども自身が、深く感じられる状況をつくりだすことは難しい。保育は、なかなか奥深い営みである。

(東京家政大学 家政学部 教授 児童学科 保育専攻)